

子どもたちの明日

Children, Our Future

2017年3月
120号

目次

- ・教育は子どもたちの未来をささえる仕事
～2016年度を振り返って～ 1頁
- ・「村の幼稚園」開設に向けて 3頁
- ・ゆでたまごの提供が始まりました 4頁

1

教育は子どもたちの未来をささえる仕事～2016年度を振り返って～

バンキアン保育所、プレイタトゥ保育所の卒園生、パ・スレイモムとピアスナ・ソピエクニャト（以下、ニャト）が当会カンボジア事務所（CYK）で働き始めて、ちょうど1年。2人に保育アシスタントとしての1年間を振り返ってもらいました。

1年間の仕事について

ニャト： 私たちの主な仕事は、村の幼稚園で使う教材の作成や教室の飾りつけと保育者研修の実施、また外部で開かれた幼児教育に関するワークショップや会議への参加などでした。その中でも特に大切な仕事は、保育者への新しい教材や教育法の提案、月例報告書作り、幼稚園の問題解決、事業候補地の調査です。仕事で一番やりがいを感じたのは、子どもたちの成長と保育者の技術向上に貢献できたと思えた時です。村の幼稚園の毎月のモニタリングでは、保育者に新しい教材の製作方法や教え方などをアドバイ



先生の読み聞かせに真剣に耳を傾ける、チュティール村の子どもたち。

スします。そこで説明したことを保育者が確かに実践して、たくさん教材を作ったり、教室を飾ったりして、子どもたちだけでなく保護者からの注目も集めていたこと、また、教え方が改善されていたことがこの1年で最も嬉しく、記憶に残ったことでした。一方で、目標だった英語での報告書作成はまだ難しく、英語の勉強はもっと頑張らなければと思っています。

スレイモム： たくさん子どもたちに教育の機会を与えられるこの仕事にやりがいを感じています。毎月のモニタリングで村の幼稚園を訪れると、子どもたちがかわいい笑顔で迎えてくれますし、家ででの生活や身の回りの出来事まで教えに来てくれます。先日、スバイドムナック村の幼稚園に行った時は、お昼に、ある園児が私たちに自分の大切なお菓子を持ってきてくれて、驚きました。子どもたちの優しい気持ちがとても嬉しかったです。活動の中で、子どもたちに愛されていると感じますし、私も子どもたちが

大好きです。CYKの仕事をしていると、田舎に住む子どもたちに教育を与えられるし、私自身も毎日が勉強なので楽しいです。アドバイザーのア alunさんからもっと多くの知識を吸収して、自分に足りない部分を補っていきたいです。

保育アシスタントが見た農村

ニャト、スレイモム： 村の幼稚園の事業を担当していると農村部を訪れる機会が多くあります。都市から離れた農村部では、村の大人たちの多くが十分な教育を受けていません。ほとんどの人が義務教育も修了していない、という村も多く存在します。そのような村で暮らす人々の生活は貧しく、幼い子どもは家の周りでひとり遊びをしたり、親の仕事の手伝いをしたりして日々を過ごします。そのため、農村の子どもたちは小学校に入学するまで、文字や数字に触れる、本を読む、絵を描くという経験をしたことがありません。学校や幼稚園に行かず、家の近所で遊ぶ子どもたちが道路に飛び



出して危険な目にあうという話も聞きました。子どもたちに集団生活や社会生活のルールが育っていないので、危険な場所や場面がたくさんあるのだと実感しています。また、保護者が教育の大切さを理解していないため、学校よりも家庭の仕事を優先してしまう傾向にあり、せっかくスタートした学校生活も保護者の協力が得られずに辞めざるを得ないこともあります。

私たちが村の幼稚園を運営する地域でも、貧しい村では地区長や村長など大人たちが幼稚園へ協力をしてくれな

いことがあります。今はまだ、就学前教育の内容、効果や重要性を理解していないのだと思います。幼稚園だけでなく、「教育」は形がないし、結果が出るのも時間がかかるけれど、どれほど子どもたちの将来を支えるか、それを分かってもらうことが私たちの仕事だと思っています。

また、幼稚園の先生たちは村の住民の中から選ばれるので、幼児教育について学んだ経験も、幼稚園に関するイメージや知識もありません。研修では、そういう先生方が理解しやすいよ

うに説明することが、とても難しいと感じます。

村の幼稚園の子どもたちに願うこと…

ニャト、スレイモム： 将来、保育の仕事をしてくれる子が出てくればいいなと思います。私がずっと生きていられないのでこの仕事をできなくなる時がきます。なので、次の世代の子どもたちが良い教育を受けて、幼児教育の仕事を引き継いで行ってもらう必要があります。そして、教育が国の柱になればいいなと思います。



(左上) 村の幼稚園での手洗い指導も保育アシスタントの大切な仕事。園児一人ひとりに声掛けをしながら指導する。

(右上) ニャトの将来の夢は、「英語をもっと勉強して、報告書を書いたり、世界中の人と話したりできるようにすること」

(下)「幼児教育のことをもっと学び、研修で上手に教えられるようになりたい。仕事もスムーズにできるように頑張りたい」と話すスレイモム。



2 「村の幼稚園」開設に向けて

当が進める「村の幼稚園」事業^{注1}では、開設地を決めるにあたって丁寧な調査と慎重な検討が行われています。現在、2017年度に新たに開園する幼稚園の候補地選択の最終段階に入っています。

2016年9月以来、当会カンボジア事務所職員がプノンペン市ダン・カオ地区（ゴミ集積地）、カンダール州、タケオ州、コンボンチュナン州で調査を進めています。調査を始める前に州の幼児教育局担当者と打合せを行い、州の幼児教育の現状や各地域のニーズなど、情報収集を行います。この打合せをもとに、当会職員が実際に対象地域を訪れ、村の幼稚園の開設可能性を探ります。この際にも州・郡の幼児教育担当者と一緒に調査を行っています。村の幼稚園の開設と継続した運営には、地方自治体の担当のほか、地区長・村長、地区評議会の女性と子ども事業の担当者、そして村の僧侶やお寺の委員会との協力は欠かせません。当会が資金的援助を完了する4年目以降に幼稚園運営に携わる人々です。

調査では、①園舎となる場所、②保育者候補の有無、③人々の生活状況、④子どもたちを取り巻く環境や教育の現状、⑤村人の幼児教育への考え方を中心に聞き取ります。地区長や村長、村に暮らす人々に実際に会うことでも情報を集めていきます。また、地区の運営組織である地区評議会とも話し合いの場を設け、幼稚園を運営するにあたり村人を巻き込んで協力ができるかどうか、また、4年目以降には責任をもって運営する意思があるかどうかの確認も行います。当事業は、調査段階より村人による自主運営を見据えているため、地区評議会との話し合いでは、このような「意気込みの強さの確認」が不可欠なのです。もし、4年



目以降の運営に対して、現段階で責任が持てないという返答があった場合には、次年度以降の候補地として、ゆっくりと話し合いを続け、幼児教育の大切さを伝えていきます。村全体で幼児教育の必要性を理解してもらい、全体で協力が得られることが確認されて初めて、村の幼稚園候補地となります。

2016年度調査での候補地の1つ、カンダール州アンスヌール郡プレイプーチ地区クランリャヴ村では、住民の多くは農業や工場勤務で生計をたてており、子どもたちも小学校や中学校を卒業すると働き始める子がほとんどです。ある村人は、「村近くの縫製工場では、12歳になれば雇ってくれると言います。そのため、村では生活のために学校を辞め、工場で働き始める子どもも少なくありません。なかには、小学生なのに年齢を偽って働く子どももいるそうです」と話していました。

調査に同行した州と郡の担当者からも、子どもが多い村にも関わらず、小学校が遠くにあるため、小学校低学年までの子どもたちが教育を受ける機会に乏しい、という問題も伝えられまし

た。実際に、当会カンボジア事務所職員がクランリャヴ村を調査のため訪問した際には、日中にもかかわらず、友だちと走り回ったり、田んぼで魚を取ったり、沼に飛びこんで水浴びをしたりして過ごす、多くの子どもたちの姿を目にしました。職員もクランリャヴ村にも村の幼稚園を開設し、子どもたちに適切な教育を与えてあげたい、と強く感じたと話しています。

2017年度は3~5ヵ所の村の幼稚園を新たに開設予定です。子どもたちが幼稚園に通い、自ら将来の選択肢を増やせるよう、皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

(注1) 村の幼稚園：一人でも多くの子どもたちに幼児教育を受けてもらおうと、当会が開設を進める簡易な幼稚園

皆様のご支援により、2017年1月から村の幼稚園でのゆでたまご提供を開始しました。現在、ゆでたまごを提供している10ヶ所の幼稚園では、子どもたちが美味しく、そして楽しく栄養を補給できるようになりました。

タケオ州カンダール村の幼稚園では、ゆでたまごの支援が始まってからというもの、子どもたちの出席率が上がりました。幼稚園の登録園児は34名ですが、月2回、ゆでたまごが配られる日は37名の子どもが登園しています。3名の子どもたちはカンダール村に住む子どもたちですが、両親は朝早くから夜遅くまで縫製工場に働きに出ているため、おばあさんに預けられています。両親がほとんど村にいないこと、またおばあさんは孫たちの出生証明書を持っていないことから、幼稚園への登録ができず、家の近所で子どもたちだけで毎日過ごすことが多かったようです。しかし、幼稚園に通う園児から「美味しいゆでたまごを食べたよ」と聞いて、幼稚園に通い始めました。人数が多すぎる日には椅子が足りなくなってしまうこともあったため朝早く幼稚園に来ており、幼稚園では友だちと遊んだり、勉強したりして楽しい時間を過ごしています。こうした特例措置についても、今後、前向きに考えていかなければならないと思っています。

保育者のタオン・サヴァン先生は、ゆ

でたまごの日は、一度に大勢の子どもたちの面倒を見なければならず、特に忙しい一日を過ごします。それでも、子どもたちに栄養満点のたまごを美味しく食べてほしいと、塩コショウを手作りし、ゆでたまごと一緒に提供しています。サヴァン先生はこの栄養支援について、次のように話してくれました。

「子どもたちがゆでたまごを“美味しい、美味しい”と言って食べてくれますし、たまごの日は登録園児がほぼ全員来て、幼稚園で勉強してくれます。栄養豊富な卵を子どもたちに提供できて、とても嬉しいです。準備は少し大変ですが、子どもたちが笑顔でゆでたまごをほおばる姿を見て、私も元気をもらっています。食後には、子どもたちは積極的に後片付けの手伝いしてくれます。ゆでたまごの効果でしょうか。食べる時はグループごとにテーブルにつき、自分で殻をむいてから食べます。カンダール村の幼稚園では基本的に5歳児を中心に受け入れていますが、最近は園児のきょうだいや3～4歳の子どもたちの入園希望も後を絶たず、受け入れていきます。幼稚園に通っている子どもたちが清潔な恰好をして登園する姿や、丁寧な言葉使いをする姿を見た村人が、自分の子どもも



真剣な表情でゆでたまごの殻を取り除く子どもたち。

少しでも早く入園させたいと思い、連れてくるのです。小さい子はゆでたまごの殻むきに慣れておらず、白身が割れてしまうこともあります。しかし、年上の子が助けてあげ、何度もたまごを食べるうちに上手に殻を取り除けるようになるので驚いています。殻むきは手を使う訓練にもなるため、鉛筆で文字や数字を書く練習にも繋がると思います。」

始まったばかりのゆでたまご支援ですが、子どもたちの栄養となるだけでなく、子どもたち同士の、そして子どもと先生との助け合いも生みだしているようです。また、これをきっかけに、村の幼稚園へ通う子どもたちの数も増えました。子どもたちと教育を繋ぐゆでたまご、今後もぜひ皆さまのご支援をお願いいたします。

CYR 情報

第16回定時総会・報告会のお知らせ

日時 2017年5月27日(土)
第16回定時総会 13:30～(開場 13:00～予定)
活動報告会 15:00～(予定)

場所 聖心インターナショナルスクール(聖心女子大学内)
東京都渋谷区広尾4丁目3-1
東京メトロ日比谷線「広尾駅」下車 徒歩2分

「ゆでたまご募金」へのご協力をお願いいたします。

毎月定額のご寄附、クレジットカードや銀行引き落としでの寄附を頂ける場合には、同封のお申込書をご利用下さい。

子どもたちの明日 120号

発行日：2017年3月28日 発行者：廣戸直江

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

東京事務所 (CYR)

〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2A
TEL: 03-6803-2015 FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所 (CYK)

#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn,
Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849 FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh URL: http://cyk.org.kh/

幼い難民を考える会 (CYR) は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。